

## アルプス諸国における日本人観光客の特性

著者	呉羽 正昭
雑誌名	人文地理学研究
号	29
ページ	59-70
発行年	2005-03
その他のタイトル	Japanese Tourists in the Alpine Countries
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00122240">http://hdl.handle.net/2241/00122240</a>

# アルプス諸国における日本人観光客の特性

呉 羽 正 昭

- |                         |                      |
|-------------------------|----------------------|
| I はじめに                  | IV アルプスにおける日本人観光客の特徴 |
| II スイスにおける日本人宿泊客の特徴     | ーむすびにかえてー            |
| III オーストリアにおける日本人宿泊客の特徴 |                      |

キーワード：観光行動，日本人観光客，オーストリア，スイス，アルプス

## I はじめに

日本人の海外旅行者数は、1964年の海外旅行自由化とともに急激な増加を示してきた。現在では、毎年1500万人以上の日本人が海外旅行に出かけている。その一方で、訪日外国人観光客数はその3分の1にすぎない。そのため、日本政府はVisit Japan Campaignを展開し、さまざまな施策の実施を開始している。しかし、量的に多いのは日本人による海外旅行である。したがって、日本をとりまく観光のグローバル化を考える上で、まず日本人による海外旅行を考慮する必要があるだろう。本稿ではそのうち、ヨーロッパへの旅行を分析対象とする。

日本人の全海外旅行のうちヨーロッパを目的地とするものは、2000年で、わずか230万人で、全体の13%でしかない。その中ではイタリアが最も多く、イギリス、フランス、ドイツ、スペインがそれに続いており、この5か国で7割を占めている。一方、スイスとオーストリアといったアルプス諸国への旅行は、その10分の1程度にすぎないのが現状である。しかしながら、観光客に関する統計資料が整備されているアルプス諸国では、その目的地の地域的分布や宿泊施設の利用などに関して詳細な資料が得られ、また他国からの観光客との比較が可能である。そこで本研究では、アルプス諸国、とくにスイスとオーストリアを対象とし、日本人観光客の滞在パターンを明らかにする。具体的には、日本人観光客の目的地や宿泊施設の利用といった特徴を、他国の観光客にみられる特徴と比較しながら分析を進めていく。またこうした分析から、日本人旅行者による海外観光地への影響を考えたい。

こうした研究課題に関して、従来の研究では、特定の顧客による特定の目的地における観光行動といった枠組みで論じられてきた。Kureha (2004) は、オーストリアを目的地とするヴィシエグラード諸国住民を対象として分析を行った。その結果、1989年の東欧改革以後、冬季のスキー客が急増しているものの、特定の目的地を目指すなど他国の観光客とは滞在パターンが異なっていることを示した。また、Langlois *et al.* (1999) は、イギリス人によるポーランドにおける観光行動を分析した。日本人による海外での観光行動に関しては、Baláz and Mitsutake (1998) がある。彼らは、東ヨーロッ

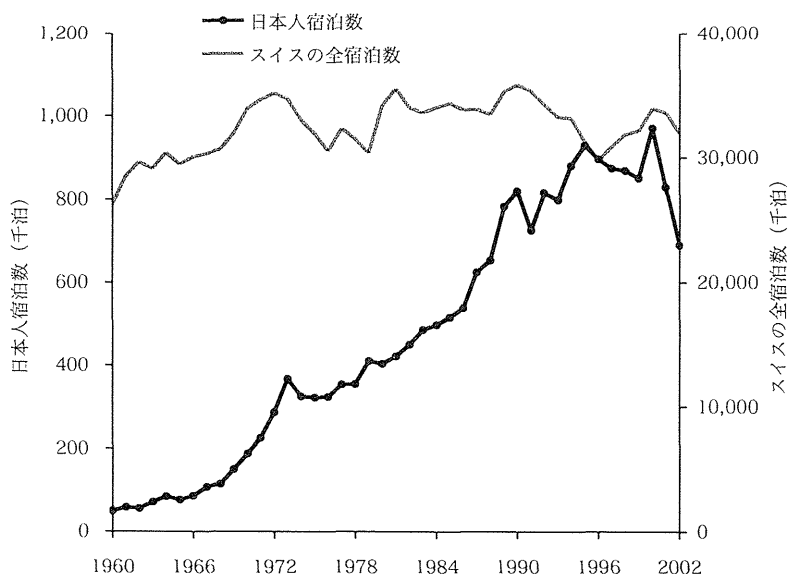
パに訪問する観光客の行動パターンを、日本人観光客を取り上げて分析し、他国からの観光客との目的の差異や、今後の展望について示唆した。

これまで、観光地理学ではある特定の目的地を対象とする研究がほとんどであった。一方、ある特定の地域を観光客の送り出し地域ととらえ、その地域を中心とした余暇圏を分析した研究もある。しかし、観光地理学が「観光」という行動を扱う以上、目的地と送り出し地域という2つの空間概念を考慮する必要がある。そこで、本研究は、両者の橋渡しの部分を追求することを試みる。

利用したデータは、スイス統計局およびオーストリア統計局が編集・発行したものである。スイス、オーストリアともに、国内のほとんど全ての観光地域における宿泊施設や観光客数に関して、統一された指標でデータを収集している。本研究では、それらの統計局が公表したデータを用いた。また、最新のデータに関しては、両統計局がインターネット上で公開しているデータを利用した。なお、スイスおよびオーストリアに関する観光の特徴について分析した浮田典良（1994；1999；2000）や呉羽（2002）もこれらの統計資料を用いている。

## Ⅱ スイスにおける日本人宿泊客の特徴

第1図は、スイスにおける日本人宿泊数とスイスの全宿泊数の推移を表現したものである。ただし、この数値はホテル経営体での宿泊数のみを示している。スイスにおける宿泊施設は、大きく2つに分けられている。すなわち、ホテル・療養施設経営体とその他（パラホテリリー Parahotellerie）である。前者はホテル経営体（ホテル、ガストハウス、ペンション）と療養施設経営体からなる。



第1図 スイスにおける日本人宿泊数の推移（1960-2002年）

注：ホテル経営体のみでの宿泊数

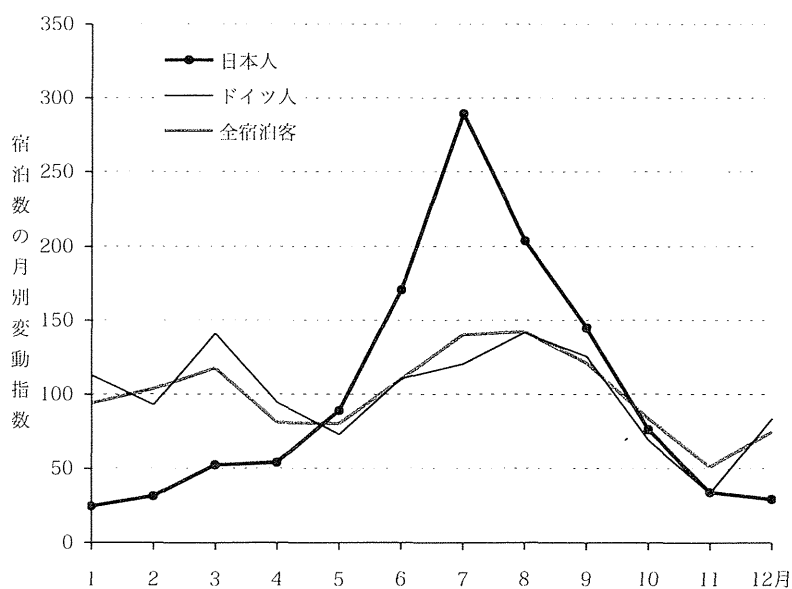
資料：Office fédéral de la statistique 2001. *Tourismus in der Schweiz 2000*. Neuchâtelおよびスイス統計局のWWWサイト <http://www.bfs.admin.ch>

一方、パラホテリリーには休暇用住宅Ferienwohnungen、キャンプ場、ユースホステルなどが含まれる。2000年時点におけるベッド数は前者が約26万で、後者が80万である。

図のように、日本人によるスイスへの旅行は1960年代より一貫して増加を示し、1990年代半ばには宿泊数が100万弱に達した。一方、スイスの全宿泊数は1960年代まで増加し、その後は3000万泊台を推移している。1970年代以降はスイスにおける観光の変革期と呼ばれる時期で（Bätzing 2003）、スイスにおける観光客数、とくに夏季の減少が顕著であった。こうした傾向下、スイスへの日本人観光客は増加を続け、スイスの全宿泊数に対する日本人の割合は、1960年代には0.3%程度であったものが、近年では3%弱へと増加を示している。2000年におけるスイスの全宿泊数は約3400万泊であったが、そのうちの1400万泊はスイス人が占めている。これに、ドイツ（640万泊）、アメリカ合衆国（220万泊）、イギリス（190万泊）、フランス人（120万泊）、さらに日本（97万泊）が続いている。これに加えて、療養施設経営体とパラホテリリーを合わせた宿泊数が3500万泊に達する。このうちスイス人の宿泊数が2200万泊で63%を占める。

第2図は日本人による宿泊数の月別変動を表現している。日本人による宿泊の場合、夏季に著しく集中する傾向が認められ、それ以外の月では宿泊数が極端に少ない。一方、ドイツ人やスイス全体の宿泊数の場合、夏季に加え冬季にもピークが認められ、春と秋に少ないといった2季型の形態を示している。

日本人によるスイスへの旅行の場合、その目的地が特定の観光地に集中する傾向が強いことが特徴である。第3図は、日本人によるスイスでの宿泊数（ホテル経営体のみ）をカントン別に示した



第2図 スイスにおける日本人宿泊数の月別変動（2000年）

注：ホテル経営体のみでの宿泊数

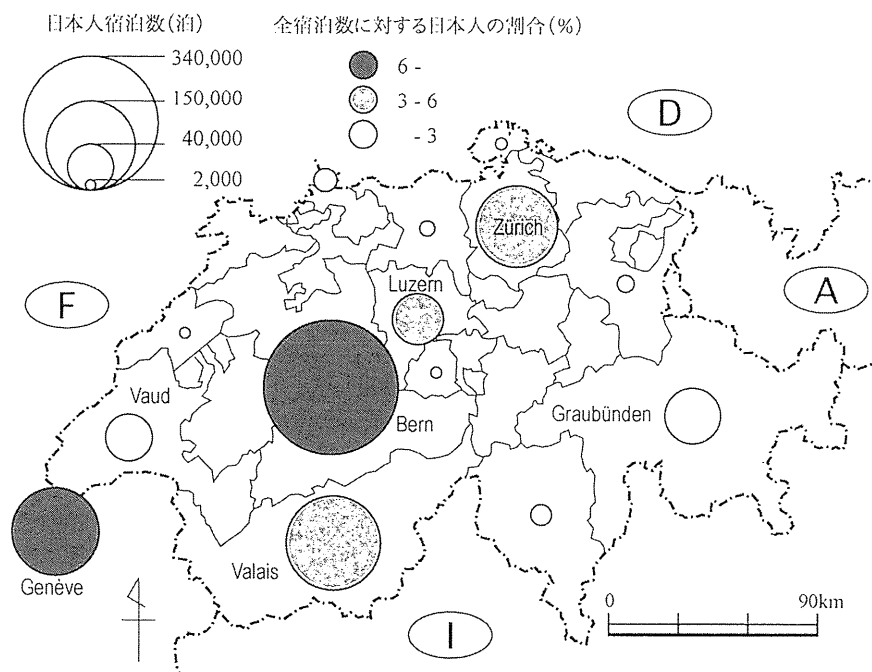
宿泊数の月別変動指数 =  $100 \times (\text{各月の宿泊数}) / (\text{年間宿泊数} / 12)$

資料：Office fédéral de la statistique 2001. *Tourismus in der Schweiz 2000*. Neuchâtel.

ものである。最も多いのはベルンで、約34万泊に達する。これに、ヴァレー（17万泊）、ジュネーブ（14万泊）、チューリッヒ（12万泊）と続いている。スイスにおける宿泊数（ホテル経営体のみ）が最も多いカントンはグラウビュンデンで、こうした傾向とは異なっている。また、カントン別に日本人観光客の割合を検討すると、ベルンで7.2%と最も高く、ジュネーブでも6.2%となっている。

さらに、日本人の宿泊先は、特定の観光地域に偏る傾向が強い。第1表は、日本人による宿泊数を観光地域別にみたものである。ツェルマットで最も多く約16%を占めている。これに続くのは、インターラーケンで15%、さらにジュネーブの12%、グリンデルヴァルトの11%と続いている。この4か所で日本人による総宿泊数の54%を占めている。対照的に、スイスの全宿泊数、ほとんどがヨーロッパ人であるが、これに関してこの4か所が占める割合は、わずか13%にすぎない。さらに、日本人の場合、チューリッヒ、ルツェルン、サン・モリッツおよびベルンを加えると、その割合は77%にも達する。表にあげた観光地域の大半は山岳観光地である。すなわち、日本人によるスイスへの旅行の場合、特定の観光地に著しく集中する傾向にある。なかでも、周囲に標高の高い山が存在し、また氷河が形成した独特の地形を有するような著名な山岳観光地への集中が顕著である。また、インターラーケンとグリンデルヴァルトでは、日本人による宿泊数が当該地域における全宿泊数の2割程度に達している。そこでは、日本人観光客の存在が非常に重要になっている。

次に、スイスへの日本人観光客に関して、その利用宿泊施設について分析を行う。第2表は、宿泊施設の種類の別みた主要国の宿泊数割合を示したものである。この表から把握できる特徴は、日



第3図 スイスにおけるカントン別日本人宿泊数の分布（2000年）

注：ホテル経営体のみでの宿泊数で、2000泊以上のカントンのみ表示

資料：Office fédéral de la statistique 2001. *Tourismus in der Schweiz 2000*. Neuchâtel.

本人宿泊客のほとんどがホテル・療養施設を利用していることである。このうち、療養施設経営体の利用はほとんどないため、ほとんどすべてがホテル経営体に宿泊している。この状況は、スイス人やドイツ人の場合と大きく異なっている。すなわち、彼らの場合安価なパラホテリーの利用が多いためである。日本人観光客の場合、表に示したようにアメリカ人の宿泊パターンに類似している。

日本人宿泊客の滞在日数は短いことが指摘できる。第4図は、日本人、ドイツ人およびスイスの全宿泊者に関する平均宿泊数の月別変化を示したものである。年平均は、それぞれ1.6、2.9、2.5であった。日本人の滞在日数は、ドイツ人に比べ極端に短いことが把握できる。しかし、これは、日

第1表 スイスにおける日本人宿泊数の観光地域別分布（2000年）

観光地域	日本人宿泊数		全宿泊数		日本人宿泊数の 占める割合（%）
	実数 （泊）	観光地域別割合 （%）	実数 （万泊）	観光地域別割合 （%）	
ツェルマット	151,235	15.6	126	3.7	12.0
インターラーケン	149,444	15.4	68	2.0	21.9
ジュネーブ	118,015	12.2	191	5.6	6.2
グリンデルヴァルト	108,938	11.2	55	1.6	19.8
チューリッヒ	97,558	10.1	223	6.6	4.4
ルツェルン	46,862	4.8	101	3.0	4.7
サン・モリッツ	43,044	4.4	90	2.7	4.8
ベルン	35,859	3.7	53	1.6	6.7
小計	750,955	77.4	908	26.8	8.3
その他	219,461	22.6	2,485	73.2	0.9
合計	970,416	100.0	3,393	100.0	2.9

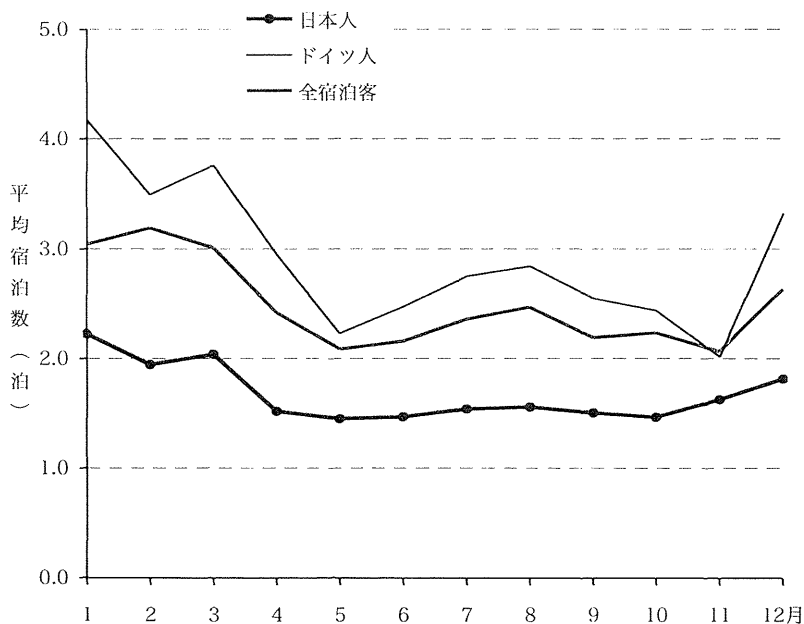
注：ホテル経営体の宿泊数のみ。日本人宿泊数3万以上の観光地域のみを表示。

資料：Office fédéral de la statistique 2001. *Tourismus in der Schweiz 2000*. Neuchâtel.

第2表 スイスにおける宿泊施設の種類の観点からみた主要国の宿泊数（2000年）

宿泊客の居住地	宿泊施設の種類の宿泊数割合（％）					宿泊数総数 （万泊）
	ホテル・ 療養施設	パラホテリ－				
		小計	休暇用住宅・ 小規模施設	キャンプ場	その他	
日本	95.6	4.4	1.9	0.1	2.4	102
ドイツ	49.3	50.7	37.0	6.1	7.7	1,350
フランス	65.6	34.4	21.8	3.4	9.2	189
イギリス	77.4	22.6	12.5	3.8	6.3	249
アメリカ合衆国	90.2	9.8	2.5	0.4	6.9	241
スイス	41.0	59.0	28.7	15.4	15.0	3,624
総計	50.7	49.3	27.2	10.8	11.3	6,904

資料：Office fédéral de la statistique 2001. *Tourismus in der Schweiz 2000*. Neuchâtel.



第4図 スイスにおける日本人平均宿泊数の月別変動 (2000年)

注：ホテル経営体のみでの宿泊数

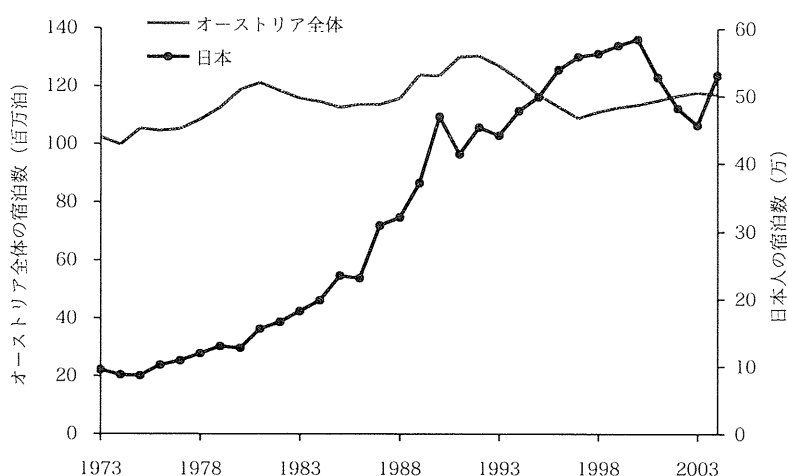
資料：Office fédéral de la statistique 2001. *Tourismus in der Schweiz 2000*. Neuchâtel.

本人によるスイス旅行の平均滞在日数を示しているわけではなく、スイス国内の1か所の観光地域における滞在が、平均で1.6泊にすぎないことを表している。多くの日本人宿泊者は、スイス国内の数か所の観光地域を周遊するか、もしくは他国における観光地との組合せによって周遊する形態をとるためであると思われる。一方、月別では、スイス全体では冬季に平均宿泊数が長い傾向にあり、宿泊客数の実数が多い夏季では平均宿泊数は短い。日本人の場合も同様で、夏季には平均して1泊から2泊の滞在が中心と思われる。

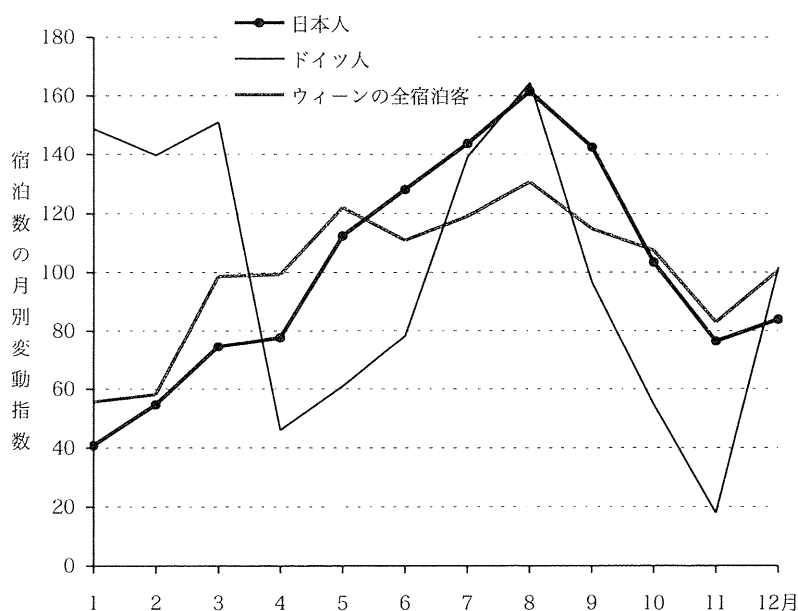
### Ⅲ オーストリアにおける日本人宿泊客の特徴

次にオーストリアについて分析する。オーストリアの場合もスイスと同様に、日本人による宿泊数は増加を続け、1990年代半ばには宿泊数が50万を超えた(第5図)。さらに、2000年に60万泊弱に達した。その後はやや減少傾向を示したものの、2004年には若干増えて53万泊となっている。それに対して、オーストリアにおける全宿泊数は約1億1700万泊であるので、日本人宿泊数の占める割合は0.45%でしかない。しかしながら、オーストリアにおける宿泊数は全体としては停滞傾向にある。それはスイスと同様、夏季観光客の減少によるところが大きい(呉羽 2002)。そのため、日本人宿泊客の占める割合は高まってきた。ちなみに、オーストリアにおける宿泊数(2003年)の44%をドイツ人が占め、これにオーストリア人(26%)、オランダ人(7%)、スイス人(3%)と続いている。

第6図は日本人による宿泊数の月別変動を表現している。2003年の数値では、イラクでの戦争の



第5図 オーストリアにおける日本人宿泊数の推移（1973-2004年）  
オーストリア統計局資料により作成



第6図 オーストリアにおける日本人宿泊数の月別変動（2002年）  
 $\text{宿泊数の月別変動指数} = 100 \times (\text{各月の宿泊数}) / (\text{年間宿泊数} / 12)$   
 資料：Statistik Austria 2003. *Tourismus in Österreich 2002*. Wien

影響が強く表れているため、2002年のデータを用いた。スイスの場合と同様に、日本人による宿泊は夏季に著しく集中する傾向が認められ、それ以外の月では宿泊数が極端に少ない。ただし、スイスにおける夏季への集中に比べると、その程度は弱い。一方、ドイツ人の宿泊数の場合、夏季に加え冬季にもピークが認められ、春と秋に少ないといった2季型の形態を示している。オーストリア全体では、ドイツ人の場合と同様の傾向を示す。

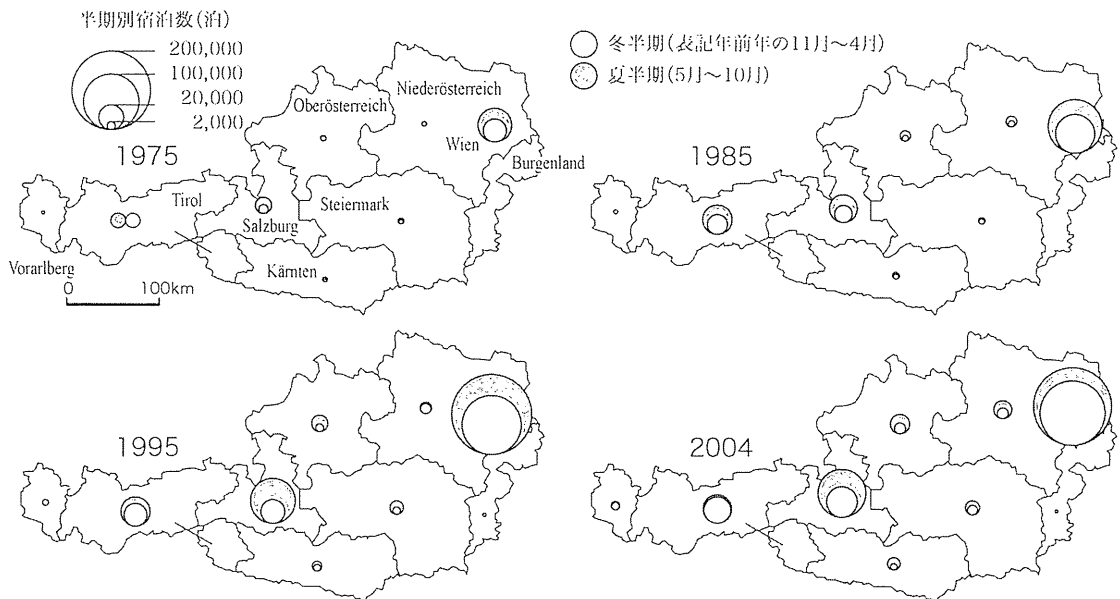
オーストリアにおいても、スイスと同様に、日本人観光客の目的地は特定の観光地に集中してい



る。さらにその傾向はスイスよりも強くなっている。2002年では、日本人のオーストリアでの宿泊総数は48万泊であったが、ウィーンにおいて30万泊弱と最も多く、約62%を占めていた。これにザルツブルクが続き、7万泊弱で、割合は14%であった。この2か所で日本人による総宿泊数の76%に達している。ただし、この2都市において、総宿泊数に対する日本人の割合はそれぞれ4%前後にすぎない。こうした都市観光地への集中は、1970年代から既にみられる。第7図は、オーストリアの州別に日本人宿泊数の分布変化を示したものである。1975年度から2004年度まで、一貫してウィーンに集中していることが明らかである。ウィーンにおける宿泊数の割合は、各年とも60%前後である。一方、チロル州では、日本人の宿泊数は増加しているものの、その相対的な割合は低下が著しい。1985年度までは2割弱の日本人宿泊数がみられたが、2004年度では10%にも満たない。逆に、ザルツブルク州での割合の増加は顕著で、2004年度では割合で20%弱に達している。

このように、オーストリアにおける日本人観光客の行動は都市観光地での滞在で特徴づけられる。第8図は、オーストリアの都市観光地における日本人宿泊数の推移を表している。ウィーンおよびザルツブルク以外の都市も含めた都市観光地での宿泊数は、最近20年間で大きく増加している。また、全宿泊数に占める都市観光地の割合は、1980年代以降、毎年80%を超えている。一方、オーストリアの全宿泊数に占める都市観光地以外での宿泊数の割合はわずか11%でしかなく、その多くはチロル州などのアルプス空間に集中している。第6図から把握できるように、日本人宿泊数の月別推移はウィーンのものに類似している。すなわち、ウィーンへの宿泊客の集中が反映されたものといえよう。

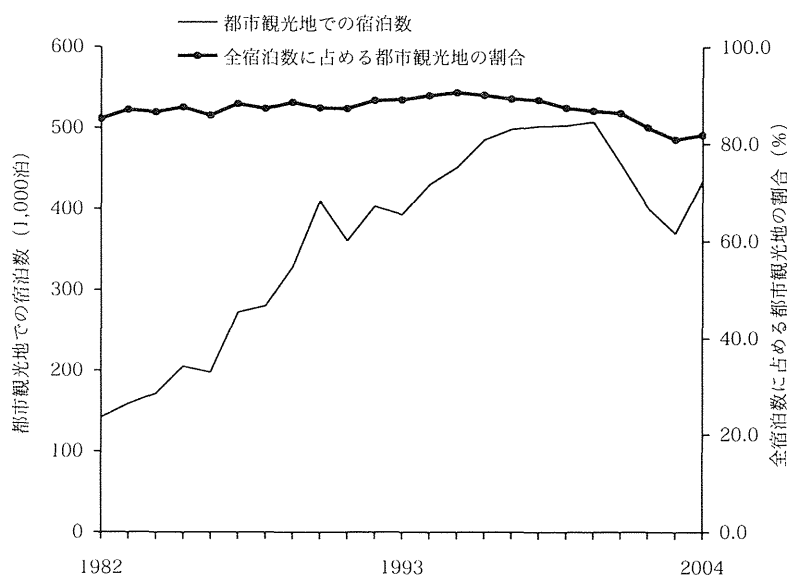
次に、利用宿泊施設に注目する。スイスの場合と同様に、日本人観光客は高級な施設を多く利用



第7図 オーストリアにおける日本人宿泊数の州別分布（1975-2004年）  
（オーストリア統計局資料により作成）

する傾向が強いといえる。第3表は、宿泊施設の種別別にみた主要国の宿泊数割合を示したものである。日本人宿泊客の99%がホテルに宿泊し、さらにそのほとんどは、5星・4星といった高級ホテルを利用している。こうした傾向は、オーストリアで最も多いドイツ人宿泊客や、それに次ぐオランダ人と大きく異なっている。彼らの場合、安価な小規模宿泊施設や、休暇用住宅、さらにはキャンプ場を利用する宿泊客の割合も多くなっている。

第9図は、日本人、ドイツ人およびオーストリアの全宿泊者に関する平均宿泊数の月別変化を示したものである。年平均は、それぞれ2.0、5.2、4.3泊である。この図より、日本人の滞在日数が極端に短いことが把握できる。一方、月別にみると、一般には冬季と夏季で平均宿泊数が長くなる。しかし、日本人の場合、冬季において若干、平均宿泊数が長いものの、夏季と大きな差はない。これは、滞在地域の差異に起因すると考えられる。先述のように、日本人の場合、ほとんどが都市観



第8図 オーストリアの都市における日本人宿泊数の推移(1982-2004年)  
(オーストリア統計局資料により作成)

第3表 オーストリアにおける宿泊施設の種別からみた主要国の宿泊数(2002年)

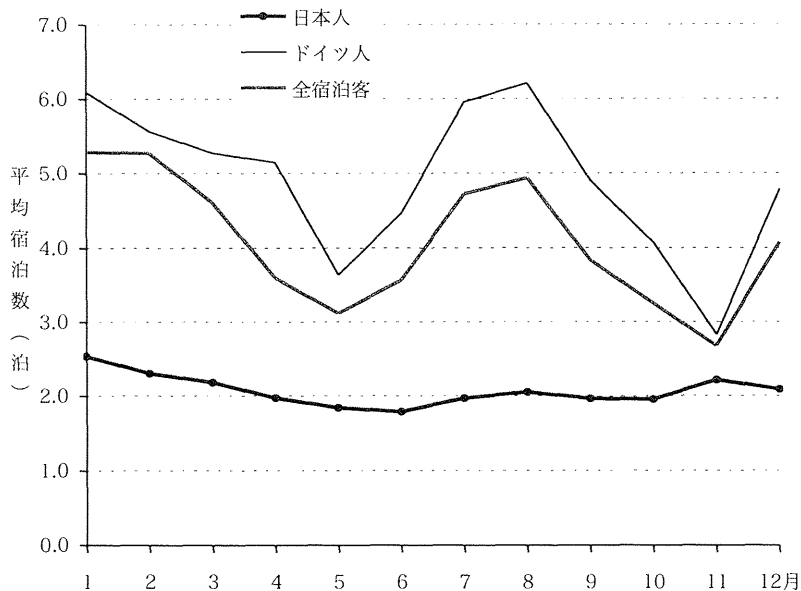
宿泊客の居住地	宿泊施設の種別別宿泊数割合(%)						宿泊数総数 (万泊)
	ホテル 5*/4 <sup>a)</sup>	ホテル 3*/2*/1*	休暇用住宅 <sup>b)</sup>	小規模施設 <sup>c)</sup>	キャンプ場	その他	
日本	85.2	14.0	0.6	0.1	0.0	0.1	48
ドイツ	25.0	35.5	20.6	10.9	4.0	4.0	5,352
オランダ	16.8	32.8	28.4	7.0	14.0	1.0	823
総計	28.8	34.1	16.2	8.7	4.3	7.9	11,680

a) ホテルの5\*は5星を表す

b) 休暇用住宅はFerienwohnungenの訳である

c) 小規模施設はベッド数10以下の宿泊施設を表す

資料：Statistik Austria 2003. *Tourismus in Österreich 2002*. Wien



第9図 オーストリアにおける日本人平均宿泊数の月別変動（2002年）

資料：Statistik Austria 2003. *Tourismus in Österreich 2002*. Wien

光地を目的地としているからである。一般に、都市観光地では滞在期間が短いため、ほとんどが都市観光地に滞在する日本人の場合、滞在期間は極端に短くなると考えられる。

#### Ⅳ アルプスにおける日本人観光客の特徴—むすびにかえて—

これまで、アルプス諸国のスイスとオーストリアに滞在した日本人観光客の特性を分析してきた。その結果は、次のようにまとめられる。

第1に、日本人宿泊客は、特定の目的地に著しく集中することである。スイスおよびオーストリアとともにアルプス諸国でありながら、日本人宿泊客は、スイスではツェルマットやグリンデルヴァルトなどアルプス空間内の著名な観光地域に集中する。一方、オーストリアではウィーンやザルツブルクといったアルプス空間縁辺部にある都市に集中する。

第2に、より高級な宿泊施設を利用する場合が卓越することである。こうした事実や、日本人による旅行の大きな目的の1つである買い物の存在は、日本人観光客の消費額を大きくしている。

第3に、滞在期間が短いことが特徴である。両国における日本人の滞在は、平均で2泊前後と短い。これは、日本人旅行者の場合、一回の旅行の際に、複数の観光地域をまわる周遊型旅行が卓越するためと考えられる。このことは、一般に、都市観光地以外では、1週間程度以上の長期滞在をするヨーロッパ人の旅行形態と大きく異なっている。

これらの特徴は、団体旅行や周遊型旅行が卓越する日本人旅行者の性格が反映されたものであろう。主要な旅行形態は、日本の旅行代理店が企画するツアー旅行に大きく依存していると思われる。その結果、特定の目的地における観光客の集中をもたらしている。日本人によるこうした周遊型旅行の卓越は、アルプス諸国以外のヨーロッパやアメリカ、オーストラリアなどでもみられる。また

言語の障壁も、これに大きく関連していると思われる。

さらに、情報の偏りや制約も大きな要因であろう。日本で発行されているアルプス諸国に関するガイドブックの多くは、先述したような日本人観光客の集中する地域について多くの頁数を割いているからである。それらの情報から導かれるのは、「アルプスといえばスイス」といったイメージや、「オーストリアといえば、ウィーン・ザルツブルク」といったイメージである。つまりアルプスを考えた場合、こうしたイメージが先行し、スイスへの滞在が卓越する。そのため、フランス、イタリア、オーストリアおよびドイツといった他のアルプス諸国における日本人の滞在は極端に少ない。

上述した、日本人にみられる一部の目的地への集中によって、スイスやオーストリアの一部の観光地にとって、日本人観光客は重要なターゲットと位置づけられている。この事実は、日本人向けの土産物店や案内所などの観光施設の立地を促進している。とくに日本人宿泊客の占める割合が大きいグリンデルヴァルト、インターラーケン、ツェルマットでは、複数の日本人従業員をかかえる土産物店も存在する。

本研究では、統計資料を用いてアルプス諸国における日本人観光客の滞在パターンを分析してきた。しかしながら、今後はより詳細な分析が必須であろう。それには、目的地における調査・分析、さらには日本人による海外旅行活動の詳細な分析などが該当しよう。これに関しては今後の課題としたい。

本研究の一部は、2004年日本地理学会秋季学術大会（広島大学）のシンポジウム「日本観光のグローバル化」において発表した。

#### 参考文献

- 浮田典良（1994）：宿泊客数を通じてみたスイスの都市および観光地。文学部史編集委員会編『関西学院大学文学部60年史：1934-1994』103-115。
- 浮田典良（1999）：『スイスの風景：スイスに関する80章』ナカニシヤ出版
- 浮田典良（2000）：観光統計とガイドブックを通じてみたオーストリア。人文学部紀要（神戸学院大学），**20**，1-19。
- 呉羽正昭（2002）：1990年代のオーストリアにおける観光地域の変化－観光客数と宿泊施設からみた分析－。愛媛の地理，**16**，38-50。
- Bätzing, W. (2003): *Die Alpen: Geschichte und Zukunft einer europäischen Kulturlandschaft, 2. Auflage*. C.H.Beck, München.
- Baláz, V. and Mitsutake, M. (1998): Japanese tourists in transition countries of Central Europe: Present behavior and future trends. *Tourism Management*, **19**, 433-443.
- Kureha, M. (2004): Changes in outbound tourism from the Visegrád Countries to Austria. *Geographical Review of Japan*, **77**, 262-275.
- Langlois, S. M., Theodore, J. and Ineson, E. M. (1999): Poland: In-bound tourism from the UK. *Tourism Management*, **20**, 461-469.

# Japanese Tourists in the Alpine Countries

KUREHA Masaaki

The purpose of this study is to examine characteristics of Japanese tourism in the Alpine Countries. The number of Japanese traveler abroad has been increasing since 1964. More than 15 million Japanese go abroad every year, recently. Although Europe is not dominant as the main destination area of Japanese, we can investigate their travel activities in detail with better-developed statistics there. The author analyze the form of Japanese tourism in Switzerland and Austria focusing on the regional destinations and the use of lodging facilities, compared with tourists from other countries.

Japanese tourists tend to visit some limited places in Switzerland. Most Japanese stayed nights in mountainous region, such as Zermatt, Interlaken, and Grindelwald. In terms of using accommodation, most Japanese stay at Hotels that are known most expensive lodging facilities in Switzerland. The length of stay at a tourist place is much shorter than other tourists. The concentration of their limited destination is more essential in Austria and can be seen in urban areas. Vienna and Salzburg are their main destination. Further, most Japanese visitors stay at Hotels among the highest class only for two or three days.

As a result, Japanese tourists tend to stay some particular tourist areas in the Alpine Countries for shorter period. Furthermore, the average amount of their consumption used to be much more than many tourists from other countries, using expensive facilities. These facts are mainly based on the general character of Japanese travel activity. Some tourist areas have recognized Japanese traveler as one of the important segment of visitors. Especially, Japanese tourists have become indispensable for mountain resorts in Berner Oberland, where Japanese tourists have formed the main visitor market and changes in the traditional landscape have also been observed.

Key words: tourist behavior, Japanese tourists, Austria, Switzerland, the Alps